論文の内容の要旨

論文題目：現代中国の伝統演劇学校の民族誌的研究　-- 陝西省西安市の秦腔を事例として --

氏名：清水拓野

本研究は、徒弟制的な状況で伝承されることが多い伝統芸能が、教育制度の近代化が著しい中国でのように、学校教育のなかで伝承されるとき、その教授・学習過程にどのような特徴がみられるのか、という問いを基本的な出発点としている。そして、学校化が著しい中国伝統演劇の俳優教育に注目し、民俗芸能研究や徒弟教育研究からの知見などに依拠して、その特徴をエスノグラフィックに記述・分析してきた。

具体事例としては、数十年間も演劇の専門学校で俳優教育を行ってきた、中国陝西地方の秦腔（しんこう）と呼ばれる伝統演劇に焦点を当てた。おもな調査校として、秦腔演劇界において、とりわけ古い歴史をもち、もっとも系統的・体系的な俳優教育を行っている省立学校という演劇の専門学校を取りあげた。事例をとおして本研究では、①演劇専門学校で実践されている俳優教育には、具体的にどのような教授・学習過程がみられるのか、また、②演劇専門学校にみられる芸能教育の学校化とはどのような事態であり、そこでは徒弟教育と学校教育の特徴がどのような形で融合されているのか、という二つの大きな問題を考察した。

このうち、①の問題に関しては、本研究の第四章と第五章で取りあげている。第四章では、稽古現場という相対的にミクロな次元にまず限定して、教授・学習行為との関連で教育の基本となる「稽古の過程」、「教育目標」、「教育方法」、「学習資源」、「師弟関係」などの側面に目をむけながら、演劇学校の俳優教育の特徴を微視的に記述・分析した。この章では、稽古現場で

展開する俳優教育の特徴を多角的に捉えてきたが、秦腔の俳優教育には他の芸能と同様の特徴と秦腔に独特の特徴がみられる、という点を明らかにした。

たとえば、演技関連の身体技法の教授・学習をとおした役者の身体構築を稽古の基本とする点や、外面的な身体動作や型の習得を超えた演技の内面的な側面（「演技の“個性”」と呼ばれるもの）も教育目標となっている点、あるいは、学習者が演技を習得する／させるための言語的・非言語的な学習資源をもちいている点などは、他の芸能の教育にもみられるような特徴である。一方、身体構築に際して“四功五法”と呼ばれる伝統的な型の集合体を習得する点や、演技の内面的側面としての「演技の個性」が“情”、“理”、“技”という三つの要素から構成される点、そして、筆者が「銅鑼・太鼓」言語と呼ぶものが演技を習得する／させるための学習資源として重要な役割を担っている点などは、秦腔に独特の特徴といえるものである。これらは、中国伝統演劇の他の種類（京劇や豫劇など）にもある程度みられる特徴であるが、文化人類学分野の先行研究が取りあげる他の芸能には必ずしもみられるものではない。

また、この第四章では、上記の諸特徴をもつ秦腔の俳優教育が演劇学校の稽古現場でどのように展開しているのか、という点も明示した。四功五法という型の集合体が立ち回りの授業やしぐさの授業といった専門科目に分化され、授業計画にしたがって教授されている点や、演技の内面的側面の探求が「演技の個性」の理解という次元に止まっている点などは、教育内容が高度に体系化・計画化され、限られた年数しか在学しない十代前半の若い年齢の生徒を対象とした演劇学校の稽古現場ならでは、といえるような俳優教育の展開の仕方を示している。

次に、第五章では、おもに入学から卒業までの「人材選別」という点に注目して、稽古現場を取り巻く演劇学校のより広い組織的文脈のなかで俳優教育の特徴を捉えた。この章では、演劇学校を「入学の過程」、「役柄選別と役柄別修業の過程」、「身体条件や能力に応じた教育的配慮（“因材施教”と呼ばれる）」、「定期試験の諸相」、「教授法の変容」、「卒業の過程」といった観点からクローズアップし、秦腔の俳優教育が稽古現場を超えた学校組織のなかで、どのように人材選別過程を展開しているのか、という点を明らかにした。この章では、たとえば、定期試験の実践が三つの側面（成績評価の機能だけでなく、学習のペースメーカー的機能）をもつことや、人材選別に入学試験や卒業試験が介在することなどを述べたが、こうした事象は学校化した芸能教育により典型的にみられるようなことであり、芸能教育における試験の人材選別機能や稽古時の学習資源としての作用の仕方がわかるので興味深い。

一方、上記②の「芸能教育の学校化」についてのテーマは、第六章で取りあげている。この章では、第四章と第五章の記述内容を踏まえて、芸能教育の学校化とはどのような事態であり、そこでは徒弟教育と学校教育の特徴がどのように入り混じっているのか、という問いをおもに考察した。また、学校化することは必ずしも良いことづくめではないので、それがどのような問題をもたらすのかについても記述・分析した。ここでは、主要事例の省立学校に限定せずに、筆者が調査を行った陝西地方の秦腔の他の俳優教育組織（民営演劇学校も含め）の事例も適宜もちいながら、顕著な歴史的変化がみられる「教授法の変容」、「師弟関係の変容」、「学習と労働の関係性の変容」という俳優教育の三側面を中心に取りあげ、この問題を包括的に考察した。

さらに、本章では、秦腔の俳優教育の今後についても考察し、俳優教育は特に教授法という点で変化を遂げていく可能性が高いことを指摘した。本章の最後では、学校化に関するこうした一連の考察が、従来の芸能の学習観や徒弟教育研究の枠組みに対して、どのような理論的示唆をもたらしえるかについても検討を加えた。

以上が本研究のおもな内容である。このように、本研究は全体をとおして、学校教育のなかでの芸能伝承の実態や芸能教育の学校化について詳述しており、秦腔という日本人にはほとんど馴染みのない芸能の事例を取りあげたことも含め、こうした事例研究をほとんど行ってこなかった民俗芸能研究や徒弟教育関連の研究への貢献をめざしている。とくに、芸能教育の学校化については多角的に記述・分析することを重視し、俳優教育における上記の「師弟関係の変容」や「学習と労働の関係性の変容」などの変遷過程にみられるように、徒弟制から学校への単なる合理化の過程だけとしては捉えられないことを指摘するとともに、省立学校だけでなく、教育条件に恵まれない民営演劇学校の事例も提示することで、芸能教育の学校化自体が一様に進行しておらず、学校間の教育格差も存在することを明らかにした。本研究は、こうしたさまざまな内容を含むが、今後はさらに他の芸能の事例も踏まえて、芸能教育の比較研究として発展していければと思っている。